近世説美少年録

初編

貳

遠13
1275
之

1279

曲亭菊著作
數百卷
新神変
畫迚奇

村田

近世説美少年録第一輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第三回　賊巣を突く弘元連盈を捕ふ　蛇穴を焼く義興禍胎を遺す

紹前齣復説備中久弘元が川角頓太連盈が洞の前後を掃蕩く。脱出んと要し山賊ホを或い砍伏せ或ハ生拘るその隙の男卒三十餘名奮擊突戰術を摧けばいづれも間いなくけり。有之程ハ連盈ハ透を闕び殺脱んとく憑切くふるひ下の山賊十名あまりを前後ハ立くく這脱路より出んとも弘元これを佶とえく。彼免はるゝと下知くく烈しく声と共倡ハ逃留る寄手の兵競蒐るを物ともせず。先ゞ立つる五六賊ふぐ刃を拔晃めくく雲妥時ハ挑戰ふるのく。賊徒ハ既ハ將場の野猪の箭面ふあ心地くく只骨路を殺閑んと。ゆよ足並取ハ出そ。大ひを屋ぬ

のもなく斫立られ追篭られくぬくびし故の脱穴へ入らんとせを寄手の紅流筒を
跟へく撃て留んと忍進むる件の洞の中ようしと川角頭太連盈が撃出せる鳥銃ハ
先ず進む一二両人矢庭に撃れて仆るを是時ハ鳥銃い尚ほ間ハあるとなく只管功
紫ある嶋人の近曾私ハ他人ハ舶来新渡の火器ハ誰ら撃出ハ日れざるべ死寄
と思ひ避易して左右へ散と退ける透を窺ふと連盈ハ阜蟲のごく脱穴より
跳出足ハ信しと逃去んとする程に弘元ハ安くこれを見く渠ハ必連盈のぶんと思ひ声を
掛り立く川角等と呼被ると連盈遥ハ見ずの引提る鳥銃ハ鉄丸を篭んと食
直ち程もあらせず弘元が丁と撃る銃銀の寛ひ違ひ連盈ハ右の腕と打傷られて
戛哩と落ち鳥銃の石ハ當ろ溪川の深死底ハ沈こける既ハく弘元賊の
神器を打落せ撃ば墓直ハ走寄ると連盈ハ身を引抜く
銃銀の矢声をうけく撃返ちを弘元騒ぐ身を外しく刀の柄ハ受賀ハ走

蒐れハ連盈ハ力を拔く砍んとする拔ちもらぬ引組うさぬ連盈も覚ハ猛
者なりけれが性まで上なり下ハなり且くハ相撲ハ脱ハ深疎を見たり
けれが終ハ膝ハ組布れを反さんとく揺撥程ハ寄るの兵五六名打累
ひく動せば押へく索を被ハけり是時その人の小賊ハの撃れるの計三餘
名生拘十名ハ餘りしが辛くしく脱れしその両三名ハ逃ざりけりはれが寄手の
雑兵も疎肩ハ立るのの見ハあらねど彼鳥銃ハく撃れしそのぶハ幸ひ一人死ハ
至らず却説弘元ハ洞の前門を攻さ十たる隊兵をもろハ聚合く功ある後巻ハ
疲労れるを労ひ且被傷者ハを勤るハ茱の准備ハ怠ざれども心つよく
ありて其ハ素陀六夫婦が贈りくる草葉を推揉くその磨ハ布さ中ハ食立地ハ
疼痛去く幾程もなく愈ハけり左右ちる程なるの日ハ既ハ暮ハけれが雑兵
ハ樹枝を伐ろう通宵火を焚く生ち虜を守りく暁るを俟ち春の宵なれば

短くて東の山夾のあらむ比弘元猛ふ下知せるを彼鳥銃とらふるの世ふ珎しく覚るふ底を拷ひく取揚よとく水煉を泡こる雑兵を溪川ふ下立て半日たろ漁猟せーふその川を湍の早けれ推流されても失ふけんぞり得ぞーく已ふけり。現物の流行せる時至ら弥び世ふ出む鳥銃いられろーと三十一个の春秋へ歴て天文八年の比よりむるぐの軍器ろるけふ間話休題あの日又弘元ふ隊兵ふと共侶ふ連盈が住做ーる洞中ふ入てろるよ三四百両の金銀あり。その餘調度衣衾の類酒器骰子るどよ至るまぐ物みるあらむとふ主あー登時弘元ら隊兵ふどろくろく今あの洞を毀むふ後ふ又山賊の巣穴とるるとらぞやかれ山木を伐く焼崩さんと必ふ主ぐれ金銀ふ囮の至宝土石と倶ふ棄べ空まあらむ。這財帛をの三取出ーと。如此々々ふせよと指示せば隊兵ふらろを泡て形のぞく相計ひら毅ーく樹を伐く前後の洞門を焼崩まふ石ると塁ー門戸ふれどもその石悉

焼砕けく前後の口を埋めーふ復入べうもあらぞけどもあれらの支ふ時得りく日景斜ふるりーふ弘元ふ隊兵ふる生虜を牽ーふ麓ふ下らんとする程ふ連盈ふ石の魔ふ。深痍を肩くるもぞくふ最も緊ーく鄰られくさるぐら毬を聯るとく段々とまるく縊入る。苦痛ふ堪ぎらけん昨夜通宵嘯ーぞの日途ふく死ふるり日ふこれらこれふあらむーく深痍を肩くる生虜の死せるもの五六名ふ及びーるぞそら皆垂て入くらぞ。連盈をの三頸を捕ーく雑兵ふ齎ーふ生残ぞる賊を牽ーく。当夜ふ麓より程遠らふ道場ふ宿を投め麦ふく京軍の安否を問ふふ摠大将大内殿ふ既ふ諸軍勢を牽く阿蘇の古城へ寄せ給ひとる。風聞定らるりけれ弘元頻りふ焦燥く。これふるぞも連盈ふ追捕のるふ日を過ーふ。這田菊池征伐の期ふ後れるぐ送恨さらん羽立ふ未明ふ立出く。夜を日ふ継くらもぞんとく。その暁ふ宿を出く馬の足ふ早めけり扨も昨夜

弘元ホゲ旅宿ハ貧院ゑりけれ。三十餘名の主従を少欺待ぢ兒纏ゑりゝれ。
ハの時すぐも彼草葉の効能ちぐめま変らねバ弘元も隊兵ホもこれを舐り
食ホ換くその夜優ホ睡ゆ～ゑゞと氣力ハ些も衰へむ。袷とのひ恰とのひ素宅六
夫婦ゲ既ものゑれハ食その恩義を感ゝ只管路をぞ急ゞける。案下其生
復説大内左京權大夫義興そその日大宮司の宿所より阿蘇谷の陣ホ
ゆゝ来く大伴親春太宰教頼ホと譚ぢるゑう武俊ハ西く山の城を落ぢ。
當國ハ賊徒ゑ～者ゲ華洛へゆゝ来ゆく絆の趣を言上せん谷々も某と
共侶ホ上洛～く這回の保徴たるべ兒その敗原田以下の人々ハ當國の守護ホ
出ゲ身の暇をぞ乞せんとて即原田山鹿宇佐千手酒殿立石ホ諸隊の主將を
本陣ホ招ゑ聚ゑく件の由を説示～各位ハ是より～く来邑ホ入ゑ勿論
時々穿鑿く武俊ゲ所在を知らゲ速ホ推寄く討果ぢんゆ所ぢゑゑゑゑの

笑もちろ沼のゑ～とらゑ衆皆一議ホ及ゲ。言葉～々退ぢく。その明旦阿
蘇谷ゑ陣帰～く已ゲ知る居城ゑ々へ還ゑりけり絲ゲ大内殿の三將ハ帰洛ぢ
大軍ハ要ゑ～とく隊兵過半ハ本國ホ返し遣ゑ。僅ホ四五千の人馬をゑく且阿
蘇沼すぐ退ぢる不題阿蘇沼辨才天の別當を鱗角院法橋と呼做
たゑゲ鄕當ホ義興ゲ大軍をゑく沼上ホ陣せ～ゑ當社ハ菊池武光ゲ建立
たゑゆゆゑゑゑ這回武俊ゲ事の起ぢ～ゑう出家ゑれども舊縁の出来を
怕れく出も迎へぢ姑く山林ゑゑ籠ぢ事の容を窺ゑ～ホ武俊ハ西く洛ぢ
阿蘇山の城を破却せられ摠大將義興ゑ～ゑ又大伴太宰の両將と共ホ
阿蘇沼の邊すぐ退ぢゑゑ～その宮えゑ～ゑ～ゑ鱗角院ゑゑう曩ホハ縁
坐の憚あれバ姑く影を躲せ～ゆゑ武俊既ホ洛亡ぢれゲ寄ゑハ刃ホ血ゑ～ぢ
當國ゑく沼ゑ～ゑて又大内殿ハ當社近く陣～ゑを知ゑ～ゑ接の義ホ

及ぶべきを更ふ後日ふ咎めを遺んを恢これも亦影護のり絶たざるを菊池氏ふ建立せられし神社なりとも。これ武俊が謀反の説ゆを一毫も與らざるを出家の
ゆるるまさるべきの舊縁ありとく首を召ゆるとおもうしを何日まぐるべくして在るべ死。
出迎るふ優をエるけんと尋思をつつ宿院ふ立ち入る。両箇の徒弟城後へく義
奥の陣より赴んとを。その日大内義興を身近死士卒百名ばかり引ゆ親春教頼
ら多と共侶ふ沼上を徘徊しく遂ふ辨天の社頭ふ来るふ躰几を立ててを東を
談しくありけれ。鱗角院ふ便宜を泛く即大内家の近臣ふ由を報名簿を遞
与しを云云と陳しるべ舵く披露ふ及びるり旦ふより義興を鱗角院ふ召
近つけく社頭ふ在く對面を主客の勢ひ異るし鱗角院ふあるく帰陣れ
祝ぎを述けるを義興ふく冷笑ひく某儕ふもこの所ふ軍兵を屯せしふ院主ふ
絶く出ふ迎へを武俊ふく落亡れが舵く退陣のけふ及びく出て来るを遁

かるべを。當社ふ菊池武光が時建立のしをの笈えあり院主ふ武俊員の人狡。
今も舊縁を出ふをのくその旗色を元ん為ふ遁参まくるのるべし。然ふそあるる。
いふべを。と詰問きく鱗角院ふ。ふ頭を擡げ。摠大將上ふ在を貪の道
いべるさまを正を意匠を仕ん御詭でいひくども當社ふ初菊池氏の建立せしより
いくばくの歳月を歴くいよ子孫ふその祖の心ふ仮ぎ信仰疎るのをるを年来の
兵乱ふ社壇ふ大く荒果しを修復を発よをるるけれが儕ゆち券縁せん為ふ
貪道師弟他郷ふありをとりく見参ふ入のゆるべ。ひしを御下向のよ皆ネ
べきの帰院仕るべられの趣賢察有く宥免を願ふのを南無阿弥陀仏念
きれが義興頭をうち掉く理のめくくを釋るを実支えとを出ひども。そをとまれ
ゆもあれ當社ふ菊池が祈願所るべ逆徒を守護の神をを問ぎとも安るる
這回武俊追討の序次をとくく毀垂ん。この義ををくこるれをとるる鱗角院

大内よりの矢
大伴ちの春
大宰ちの末

驚くべき物体なるものを兼ねたるものなり。菊池が建立する所は安
藝州嚴嶋の神と一体なり。菊池氏の滅亡は當社の見放なるけんを初て遠
今ゆゑに神社を毀せんとたくみ憚ゆへども感心あるべき下知なり。欲ナ
例をあらひ出す。紫の廣嗣東の將門逆惡謀反の骨張なりしも死後は
神ゆゑ齋きそこの神社は今もあり。況當社はその類ゆあらむ。菊池が建立
たりとも今は菊池を拘らず只寛容のあん沙汰を願ひ奉るのみ。ホテをも人くど
口説に成現その言の理りなるを側皆者親春は太宰少貳の目を法にて齊一
義奥を諫るに菊池は由ある神社なれば破却せんと宣ふ。傾けまゐらせあら
神ども別當の陳するよりも亦捨くべし所あり。鬼神は敬して遠ざけべし。凡そ人は
征伐を加へんの物体なり。賢慮を凝らしめ。遠代は嚴神なるべ
僅に頃なくして。趣その意を汲まり某とく權威ゆ誘ひて神を神ともせず

るゆゑに鱗角院が遲參のよりをいと疑しくぞ思ひ。その試んとて言の
あるよ及べる人ゆゑに本社はいまの仮ゆ立措くるを許さとも免しるべきは當社なる。
彼毒蛇のるこかり。鬱ゆ某諸將と共よこの処に陣せり。折その夜沼水猛暴
きく人馬を殺損傷れり件の神の祟るるんと人喋々ちく魚ゆり大蛇ゆを
あれ鬼ゆもせよ逆徒の討ゆを奉まり。義奥が軍兵を害せりこれ邪神ゆく
毒蛇を退治ちく士卒の魂を祭らんと。豫さくるゆ出ひ。阿蘇谷よりまの
処へ來ゆる途ゆく焔硝硫黄の火薬を買取せ。且あのところの樹を伐て。
薪も殺准備せりなくゆ件の毒蛇の穴いまの社頭ゆありとして東のかくゆ
年ふるく虚ゆなりくる横ゆ。魚立遠りて素神と。
辭せりく下知するを麟角院推禁くゆ慌くる声を戰。あん貴ちくる
白蛇の神ゆ実験あるく祈るゆゆ利益ゆ素是雌雄の白蛇を大約

夏四月より秋九月の比すべて穴を去て沼の底に有り。又冬十月より春三月の比すべて沼を出て穴の中に有り。唯雄のみ穴を出て沼水を飲む。雌は穴より出ず。沼水を飲むに不浄の所行城めゆゑども怕れて近らず。とかく倘其方に向て尿するに、穴の充倉を相距ること九五尺あれば立地に祟を受て病煩ふ事疑なし。穴の充倉を相距ること九五尺あれば立地に祟を受て病煩ふ事疑なし。

六十間ばかりと大なる樽あり。只今にも腐せ残れる十人ばかり抱へるほどの餘り

ある巨樹なるぞその虚の中にて春冬に栖せるなれば霊蛇なるべし。輙く

退治せられんや。非如管領のかん威徳にて焼亡すとも後の祟をいかでかせん。

思ひ止りぬべきと舜を盡して諫るを義興聽ずして声を苛立復して諍ふと

ぞ。毒蛇を神と敬ふ愚民を惑せ賣僧の奸計武弁の人の欺れやすの議を

禁ずるのあらば穴の焼草ゆるきえいと毒蛇の祟がそろそろ軍今を用ひ

ざるや。奈何々々と敦圍る面色凄ゝかりければ鱗角院も怕惑ひて。ふたび口を

開て宣ふ。大伴太宰の両将も禍を怕れ威を憚りて寒の秋にも合るのみ又ひとも

るるのみ。士卒いまだ鬼胎を抱て安からず。たとへ雲時立難しと義興頻に焦燥て

者共をぞ猶豫せる。毒蛇が沼を折るに折るに輙く退治ぞかんぬ。今春の

春の季なれば穴を居らんと疑ひるにこそ。せばやと牀几を放ちて樽の邊に赴

くゆゑ親春も教頼も野の士卒共侶を後方に跟て俱にゆけば鱗角院も徒

弟を招て所を聚合て。當下大内義興を仰ぎて件の樽を焼滅歳月を

経てけん枝の四方に茂ひて。瓢形の日景を遮る。幹の幾間ばかり磨て拉て朽て

虚なる内に席拾枚敷べ東西に出る大枝の注連を張て

下に編小なる雞栖を建て義興を冷笑ひて。者共を焼草と虚の

内に積容れて焼殺さぬ。疾と。価く人に主命を雑兵にかのそろ准備の

薪焔硝硫黄を扛擔ひ来て樹の虚へいとこもるく投入れて火を根しく焼立

まび義典ハ十反ばかり西のかたへ退き、瞬もせず目庁とろ然程ハ猛火焔々と
まき糅を焦し、烈燄漸々ハ立升ほどの枝細條を焼落せ勢ひハ凄もあい
ざるハ虚の内糅外ハ積累なる薪ハ硫黄焔消をまゝくれば煉燈なる音
凄ゝく煙ハ虚空ハ布満く有頂天も届くべく、燬ゝる四下の壤を焦して、その
烏坤軸まで通るべくらんと覚く人魚魂を落し胃を潰さんとハのみな梁ハ
薪盡んとすると烏ハ義典ハ下知して初よりハ鞭ゝ焼草を虚内へ投入れさ
せく此も間断あることなければ甚なる霊蛇神龍なりとも免れ果べくもえ
ぜりけり。如是而燔と焼く程ハ、ハのみ已牌ハ翔さく申の比ハ及びゝ稀
なる大櫃ハ火烏の至る限もなれば終ハ蘇まぐ焼摧けく灰燼となる。
倒るく折ゝ倏忽大地震動して裏然いる物凄音霹靂百十の雷電の一度ハ
墜て霹靂く如く穴の中より両道の白氣忽然と煙を衝て立升ほどの

程ハ両箇の白蛇悪くと煙の中ハ顕れるその長各廿仞あまり真白絹を引るが如く
飜翻とく東へ靡き西へ流れく閃たり。浩処ハ沼上より最美の山雞と逞
きげる雄野雉と着羽高く翔出く件の白蛇を追んとせ登時白蛇の身中より
薄黒色なる両箇の蛇走り出遊留く件の鳥と戰ふ程ハ又鞭ハ小蛇共空
中ハ顕れくたの闘戦を援けゝ山雞野雞いづれ肩くゝ既ハ危くなれば折又
沼上よりハと大なる睢鳩と一隻の錦雞翺翔く山雞野雞ハ力戦く彼ハ薄
皂なる両箇の蛇と鞭ハ小蛇を追散し、突落々々て倶ハ白蛇を撃んとせ然ども
白蛇ハ怕る色なく頭を擡げ舌を吐く四箇の鳥を呑んとく且く桃李の程ハ
又西の方よりハ形状鷲より巨大なる烏ハ一隻の孔雀翔て来り山雞ハ又相
資けくれば四方より捕鷙く蜚角のく突ハ隨ハ両箇の白蛇ハ四段とるく。
地上迴ハ墜んとせ時ハ疾風吹昇れく砂を起て天色の朧々とるく隨ハ白蛇ハ

山雞錦雞雉子孔雀好く蛇を吸ふのみ但黄黑ハ黑ハ蛇も小鱗属ハ老ハ陸ハ三種あり

出像第九

けらえ五隻の鳥も何処へ飛去りけんか消ゆる如く影だにもなきぞ後の大内家の大奸雄の逆臣ども来く禍を樹主を惑はしその家を倒さんとこの時義勇の少年あり又毒悪なる少年あり怨を結び相刻しその長善の徒と百折千磨の艱苦を嘗く必死の厄に及ぶこと共雄の侠客あり善の與へ悪を夷げ世の英雄と相會して奸を鋤き逆を滅し彼七州を討治めんとこれ是その前兆なりと云へ神なる身の誰か知るべきこの奇異なる光景を目前に見て農人の驚き怪しむのみなり後の出来を測りかねる今も安危を定めがたく大伴太宰の両将さらに晋駿嘆きるのこと辞を生ずるのみなりけれ悍く勇猛義奥も悩然と為く醉るが如く呆果る可きなり折衷本齟齬説備中仗弘元は日者山賊連盟が首級を齎し生虜を牽き二隊兵三十餘名を率く阿蘇谷の陣に赴き一揆大将義奥と大伴太宰の両将と共侶なり朝未明に陣

帰ぬ来く阿蘇沼の邊まで追ぐ退ぬるより彼が迹を慕ひ路を急ぎ今又てよ走著ぬるより義奥グヲ大蛇の出来を媚く出でく蛇穴を焼くとふ緯の趣彼隊の士卒を偽りく且驚き且怖れ出でく義奥を諫んと出べ陣門に入らぎ来く直に阿蘇沼辨才天の雞栖前に来ると灵蛇の寃魂煙火の中より虚空遥に飛揚して五隻の鳥と戦ひその緯の為体を圖らぐ目撃すければ主従齊一驚嘆して怪しぎとふのみ就中弘元は出でひあはるるとれども心に秘く言ふ出さぎ事果て後社頭に入く義奥を見参を介き義奥に嚮に當社を陣所にせんと云不幸にして弘元が諫言暗に的中せるその雪沼昇の出来あり軍兵驚喪ひを意中に差く弘元を憐れまぎる主従のぎるりを物怪の幸いなりと出でくるに誰か料ん弘元の隊兵三十餘名皆悉くかへり来ぬければ義奥はこれを歎ぎ霧に憎を出ひを色に出ぐ

弘元を坐右近く招死まく。左元右元うちうち合笑ミ和歌を暴小沼暴の宵。
隊兵と共ゐ漂没ゐれば世ゐ死人と思ひ日比経ゆう悲ゐく。ゆゑ来ぬゐ以
て元あらめと問れく弘元さシいかの夜在下も漂流しく無死と考る折漢舟小
助無せられそゞ宿所ゑ伴まく。其処ゐ一宵暁せゐ不意隊兵ゐ索ゐ
るゐ環會ゐ死ゆゑ。當國飯田山ゑ川角頭太連盈と云山賊あり。麓の小
賊五十餘名を従へく。彼山の洞を小寨ゑ考ゆり抑件の連盈ゐ近曽菊地
武俊ゞ招ゑ応じく。阿蘇山の城ゑ無ゆりゐ忽地ゑ心変りく武俊ゞ軍要
金四五百両を竊取りゐ下の賊と共侶ゐ逃く飯田山ゐ帰ゆ死ゐ由を定ゐ
告るゐ。ゆゑ是ゐより在下ゐ連盈ゐを捕捕ん為隊兵をゐく彼山ゐ推寄ゆ
ゆ。如此くゐ討ひく遂ゐ連盈を捕捕ゆ。その餘の奴原ゐ或ゐ砕伏せ或ゐ生
拘ゆ。洞の石門を焼毀てその巣窟を帝ひひ死ゆゐ連盈ゐ初見ゐる深痍ゑ

堪ず。次の日山を下ゆ途ゆく息絶ゆを首領ゐれば賊ゐく即首級を齎し
たり且生拘りし小賊ゐも五六名死しゆ。これらゐ葉く首を捕らぼかくく
その宵ゐ旅宿ゆく管領ゐ諸軍を牽く阿蘇山へ寄せるひとゐ風声灰ゐ
宵ゑ夜を日ゐ継く路を急ぐ。彼山の麓る阿蘇谷ゐ走著しゐ。
菊池ゐ為く落亡ゐれば管領ゐ也を釋く大伴太宰の両将と共ゐ其処ゐ
退死ゐ為るよう。彼処の里人ゐ伴宵く心ゐく慌しく時を移ゐ迹を暮
ひく只今参著せり在下主徒脱れゞ死命を保るのみなりゞ武俊ゞ舊縁
あり山賊を討滅せゐ是将軍家のゐん餘光且管領の威福ゐ因ゐ
のみ遅参の趣ゐくのゞと言詳ゐ報しゐ義臭欽び斜ゐらぼうち合笑ゐ
額を拍く這回某辱も武俊討ゐの揔大将を奉ゆ甲斐ゐ賊徒ゐ
ゐく落亡ゐ。ゆゑ刃をすゞえ。賸不慮の大火ゐよりく鞍の士卒を喪ゐ

たれど帰洛の日将軍家ゐまうー釋ん辭いあらん。らくらのの心ゐかくやく。
いつゐせまーと思ひ不乗ーゐ御邊圖らぎ武俊ぐ餘類を一挙ゑ討滅せーた。
某さえる面を起も是莫大の勲績えあくを社頭のるゐ。れば本陣ゑ立えうそ。
首級実撿ゐ及ぶべ。先度某この地ゆく士卒をヨヌく喪ひ。この社頭ゑ年を
歴る毒蛇の所為ぐあるべーとゐ人の口ゆ戸も建られぎ。その毒蛇を殺ぶ何を
のと死亡くる。士卒の魂を慰むべ。と思ひよければ如此々々ゐ計らく蛇穴を焼崩を
件の怨を復ーくう某も是よりと本陣ゐゆ居べ。長途の疲労を憩へ。と
亦他事もるく応る心の中ゐ思ふ。初これ弘元ぐ博士態る諫言の快らぐ
ゐりけ居よ。その言果ーく當ぐーぐ是よりうれを侮るべ。いゐせまー。と思ひ。ゑ似ぐ弘
元不測の功を立く菊地ぐ餘類の山賊の首級をゐゐ賓せーゐぐ為ゐ忠ゐと
思ふ。終るとき娼ーとて執念深く祟らぐ人ゐあーぐと思ひ人ーうち解く応合

叮嚀ゐりければ親春も教頼も又大内ぐ光黨近習も弘元を労ゆく齊一誉を
已ばりけり却説大内義奥ゑ雑兵ホゑ火を滅さ灰を掻帚ーく親春教
頼弘元ホと共侶ゐ蛇穴のほとりゐ赴くつらくと見えをえるゐ白蛇ハ火攻の苦を
ゐ堪ぎりけん穴より半身を出ーん。送る隈るく焼亡ぐ居。その白骨両骸ゐ頭
骨の大なる居王粉挽臼ゐも勝りべ。その餘小蛇の骨ヨヌりされぐこの為体ゑ窃る
その毛骨竦立まぐゐ駭嘆せぐとゐ。そぐ中ゐ義奥をつぐとそうち微笑を
人々何とり思ひのゐぐ灵蛇とゐひ。虚名ぐ寔ゑヨ火ある物るうぐ雲を起ー雨忽降
まく。火の害を避くべゐ焼れく骨のぐ留ゆーいその霊るを知るべのぐ。御ぐ
煙の中ゐ怪ーぐとく顕れーゐ皆觀る者の惑ひよを。壁言ぐ杞人の目を驚ーゐ
ぐ。ゑ同ーるべ。疑心暗鬼を生ぐとゐ。世の常言ハ以あるゐ必ーるゐ
ゐる人ゐ笑ーと笑れるべ。武士ぐゐ恥るぐ。家隷ホゐ。

雑兵ホロビ昏せるとて誇り自ホ窘ミ合ひ畏皆齊一頸を切く義りぬと応けり既ニ事果て與竭る義経を社頭を出く戰の士卒を前後ホ立て綱掻繰る三歳駒の足掻きぐるホ陣所ホ入れば親春教頼い途より別れぐ。その隊の陣へ退けり當下麟角院法橋い義経の後ホ跟く送りく陣門れほとりホ赴き礼を舒く宿院ホ退ぬ程ニ弘元も亦義経ノ陣所ニ到る連盈ゲ首と生虜を実検ホ備へ且分捕の金銀をそぐまく披露ホ及び義経則生虜の小賊ホい京師まぐ牽べくとく士卒ホ下知て頭巾を刎さ皆陣前ホ梟さぬ。惟連盈ゲ首級をの京師へ上せんとくその准備ぬ。

かく掟果てよりこの地ホ所要なくてりる義経ノ夜さう弘元を招きたいぬ。某い翌の朝親春教頼ホを相伴く急ぎて帰洛ホ赴くべ。御遍い殊さう大功ぬり共侶ゆとぬくども。いうホせん武俊既ホ落亡くいまぐその往方をまらぬ渠當

國ホ躯居らぬ後の患をきえのえ御遍い姑くその地ホ送りく這奴ノ所在を穿鑿金まぬく當國ホい原田の徒まぬ原ニ死武士ニ死ホあらねどかる夏ホ熟ぬりのいれ遍の外ホありとも覚ぬ某這回凱陣の日ホ御遍の功い送まる。將軍家ノ賞えあげく恩賞い後日の御沙汰ニ及ん且當座の牽出物ホ賊の巣穴ホ焼毀ちーと死分捕の金銀をまぐく御遍の所得ホまぬのくちぬ。ぞよと懇切ホ私恩を被けく説示せども弘元ノその金を受ぬ諾ぐ合ぬう仰兼りいひ及まぬれども年来の兵乱ホ民疲労て上の財用ニ乏ぬ折ノよりや九牛の一毛ニとぬ。その金銀を受奉る臣ぬるれの志ホあらぬとの義い許さぬのくとく幾編ホ只固く辞ひく受べくもあらぬれば義與いよく賞嘆ーく御遍い実ホ廉直ノ人ニ九世ホ武士ぬるの誰もかくてあべれ。この義も披露ホ及べーノ件の金銀ホ水火の為ニ死ーぬる士卒の妻子ホ分與んとぬ一議ぬう弘元陣後ホ退けく

ひとり熟思するに曩に主従の必死を救ひ山賊を討と雖も素戔嗚夫婦い
の河蘇沼邊に年ゆゑし雌雄の白蛇の化したるらんその所以を甚麼と推
生を彼漁者の姓名を即子自素戔嗚の名を綾女とのひ兄素戔嗚の
素い兄白い戔嗚兄蛇字の片偏に子より六目に當るこれ已に亦蛇且蛇の
異名とあやめとのり然に永兼年間殿上の根合に良暹法師が筑摩江の底のゆり
さをよそぐら引るあやめのねもあらるとよみるとあやめ菖蒲常に蛇蝎を
てらふるれと右府の難ドのひとりや袷とのひ恰とのひ素戔嗚夫婦い白蛇なりと
今やう強くまひしなり彼ホが命数竭れば仇の為に逼られてその死期近まり
とのひい大内殿を焼殺さるを豫てより知まが為んかる霊蛇も前世の業報に
よるとあるく左にも右にも脱れがたけん宛も去らぬ猛火を受て灰燼となりて亡しる
況生くも不便かの折升る煙の中に両箇の白蛇のたそるいそが寃魂ゆくあんか。

然に彼ゆくも彼白蛇に戰捷る五隻の島いこれ何ホの因縁ぞ天機い測
がたけれども霊蛇を殺せし嘗領の久後いと心ともし紀そのヲに報ぜとも。
子孫の為に祥あらず。災難い是のごとくに素戔嗚夫婦が贈りこる。
彼草葉も亦奇なるかあるを外朝劉宋の武帝が賤しのりし死蛇穴に入こ
獲ごとふ劉奇奴草の類を狹件の草ハこが主従の饑に充る物なるに。
きの途中に皆失ひく今ハのたるの一人もるし只彼飯田山の地圖のみ幸ひ
あるにあらとひとりとら取出しこれら披らく再見るに初の地圖の紀失せく四言四
句の漢語にあらこあるを什麼とのふと怪とるぐら晴れ定めくよく視れば。
今生相識　來世故九　木免参處　是興亡秋とあり。
さるにとも。この句い讀易くこの意い究めく悟り難し。要あべしとのひ
ぬく麓底に秘く遂に又人に知らさじ。是よりの後年歳歴さ。その子

音就の成長やうと云白蛇のうを其示ふく件の隠語をうけ一とゝ然程は大内義興ゝ。その次の日は大伴親春と大宰教頼を相伴て二将の軍兵四千餘騎既に帰洛ゝ赴行を弘元ゝ阿蘇郡に留りく。武俊ゝ往方を索ふに此の便宜もるぞうけり。元ゝ遠留の間麟角院と相譚ひゝ。白蛇の骨をその処に瘞め灰をよせ塚を築ゝく標識に弱樹の櫃を植けりよりゝ土人これ名つけく。蛇塚と唤做ゝり。弘元ゝかくても飽ぎ。是年の秋安藝の采邑にめぐり比素宅六夫婦を追薦の為に法師を裹合く。経城讀ゝ石塔婆さへ建く。叮嚀に吊ひけり。さらの意を人ゝ知らねど弘元ゝ後の苗害を思ふに飯田山なる賊巣を焼毀さその金銭受ゝ義興ゝ士卒の敗亡を羞く怒ゝ殺ゝ。阿蘇沼なる蛇穴を焼て漫に後の患を思ふゝ行ゝ所ゝ相似れる用心各異ゝり。と識者に評論ゝくりける。

第四回 御廟野に興房阿夏に遭ふ 鴨河原に両情春夢を結ぶ

却説大内義興ゝ大伴親春。太宰教頼ゝを伴ゝ。その夏四月の下旬に異ゝ凱陣ゝけれ。室町殿へ出仕ゝ。菊池武俊ゝ没落の支の趣并に安藝列の人氏備中及弘元ゝ自己の才覚をもて武俊ゝ餘類ゝ。川角連盈とゝの肥後の飯田山なる寨ゝ在ゝ。推寄く討滅ゝ。その絆の為体ゝ。且親春教頼ゝ。将軍家義植の見参ゝ入ゝ。その日義興親春教頼ゝ各土産の貢献ゝ。登時将軍ゝみづから縁由を聞食て義興ゝ労ひ給ふ。武俊ゝ遂ゝ落亡ゝ。九州ゝ異ゝ治ゝ。皆是管領の武畧ゝよる。和泉紀伊の二ゝ国ゝ鹿苑院殿義満将軍のゝ時当管領の曾祖ゝ。大内義弘ゝ。応永の初ゝ義弘不軌行ひゝ。一旦滅亡の折彼二人国を召放されゝ。遂に和泉別

堺の城に如干の城地を添て賜ハるべしよしを仰あり九州並異ハなりぬといへども武俊が往方定かならねバ親春教頼ハ手を采地に立かへりて非常の備をさをさ怠らず又連盗が首級ハ例に任して河原に梟て悪を懲し遠近人に示されけり。就て賊徒を討亡せし。備中守弘元ハ当下肥後にありといへバ彼地へ感状を賜ひぬ。この義挙もまた洛中に送らるべく掟ありしかバ義興これを奉りて形のごとくにおこなひつ親春と教頼ハ京師の逗留久しく日もあらぬに各その隊の兵をゐて皆本国へぞ還りける是よりして義興が権威ハいよいよ日ごとに倍しく在京の武士ハさら也公卿殿上人までも或ハ凱陣の寿を述或ハ加禄を賀するもの幾百人といふことを知らず門前日々に市のごとく絡繹として絶ざりけり。その頃大内義興の近習の士に陶瀬十郎興房といふものありけり。そが素生を原るに大内家第一の老党と聞えし陶遠江守政房が子にて、その身遊俸なりけれバ周防の山口にありけるを、その春主の義興が菊池武俊征伐の為山口の城にありし時

召出して、その軍陣に従しめ給ふ程京師へ将て上りて身邊近く使ひけり。抑この陶瀬十郎ハ今茲廿一になりぬ。女子にして見まくほしき相貌いと美しく心ざま亦風流を好みて詩を賦し歌をよむに疎からず。且雑楽艶曲の技をさへ愛玩ぬとのことなれバいとど寵くよりて有勢なりき。主従周防に在りし程ハさまで人も誉めざりしに亦ちから良なりけるに今茲皇城の地を踏初て京師の手ぶりを見てしより心に裏恥かしく思ひけん日野西中納言兼顕卿及萬里小路中納言賢房卿ハ大内家と疎からぬ由緒ありけれバ瀬十郎ハ勤仕の暇ある毎に然る二位の君達を訪ひて歌を学び又雅楽音律の技をも問ひ学びけるに兼顕卿も賢房卿も当時ハ尚生上達部にて年齢も共に弱かり応仁の兵乱以来公家武家倶に衰微して朝の絹細からぬ貴人ハ稀なるに日野西萬里小路の両卿ハ大内家の資けによりてゑしからずとありければ、その方ざまの人として必ず召入れて對面をゆるさるめり。況瀬十

郎奥房は彼家の老權なる陶政房が愛子なれバ大かたならず欵待して辞
敵にあてなかけそ瀬十郎をいと辱しと思ひつゝ暗譚に小夜を深して辱る。有
如之程に陶瀬十郎奥房は一日十禪寺村の邊に私の所要ありて赴きしかバ
夏の日の癖なれバ御廟野の邊ゆく猛な夕立の雨ぬのそゝぐに雨具をもたせざりけれバ。
只一箇なる從者に傘を借りて來よとて栗田口なる相識許遣しつゝ。己れハ
まてしも俟んもとて路の傍に荒傾たる圓通堂の檐を仰上て遽しく走り
入りけれバ。それより先に彼処に笠やどりしてありけるものありけり。見れバ年紀ハ十八九なるべし
美しき一箇の女子なり。人待良に立けり。顔ハ暮春の櫻花の如く雨に窶し風に
悩る風情あり。姿ハ仲秋の新月に似て雲を恨み雰るを避しと思ひつめ西施が心を
患ると見ゆ。太真が渇に堪ざりしもかくや有けんと見ゆる可なるに羅衣もかゝる花なる
ゆく頭上の飾まで。玳瑁白銀のいろくろき。流行を上首とせざるハなし。瀬十郎ハこれを見る

あらぬ眸の頻りにうち驟れて向よりもべくもあらずに女子も亦瀬十郎が儔を
くらぬ男子風流よきまでもおもひおもげなる秋波にみくらち微笑をやる殿是方へ
入らせたまへ。其処ハ濕吹の被るべし。ゆめハ朝よりよく晴るも虛憑ならぬ待つと押く
まげにぬのめくしやき声ハ宛鶯の初音に似たり。春なるぞ春の心の動きて初し瀬十郎も
又えやむく噫おおいはしかりける。おん身も亦おくに霽間をまつにやあらん。從者を俟しあへ
やと問かけて身邊に立よれバ女子も有繋に恥しの森の木葉欸のみぢまふ顔を
背向けれバとよ妾ハ大津に所要ありて彼処に赴きし。の家に帰るなり。
伴なる男の侍りしかど渠は衣裳何くれの物を集めて后より來んと云れまゝ。なほ
あく獨りぞ來し甲斐もなく臂笠雨に路去りあへず往還稀なる十字堂に立也。館
きえ日の惜く亡心細さを限りもなかりけるかゝる時とて憑しく言問ても他生の縁一樹
蔭の笠宿り。おん身の御坐ます程ハ心はよく侍るなり。何処の殿にて渡しますぞ。おん從

者は侍らぬぞや。と問ひ給へば瀬十郎らよゐ笑ひげふうち領元。吾併は二條の遠ゐ。
某甲殿の家臣。後者ゐ。あれども傘と借せん為ゐ粟田口まで走りたゐ。
いまだ借ぬ帰まで。あれ分も京の人ゆゑあらん。ちゐ比東ゐ。太田持資入道の
ぶぎゐ。濡ざるまりを旅人の迹より晴る野路のむら雨とよりぬる如く且く俟ば霽ぬ
降雨のあまたご程もなく。暮かる日をいぐらせん応仁以来京師さら荒る侘の處
まりり況あらん人家の稀ゐ夜行をいかく女子一人ぐやらんや宴ゐ便ゐ
そとのゐ女子の嗟嘆。あらは熟ゐ路ゐ。寡如く雨は歇とも暮ぬ獨
帰せやとり然れども這十字堂ゐ立暁ぬべくもあらぬ。ゆうのぐ狎々あくこと
礼ゐりとあれさん欲。あ後者のゆり来べ。あ傘の端ゐ添しく宿所へ送りあらば
鄙語ゐ六道の衢ぐ佛ゐ遭ゐ似ゐ。ところゐ慈悲善根ゐ功
徳ゐらんや。安い名を夏と喚れく宿所い三條大橋のまるくゐ侍り借屋住ひ

無造作ゐ留守ゐ。あ侍らねど母屋ハ名ゐ酒樓ゆくゐと熱鬧ゐ。茵雲ゐ
ゐ貧門の地尻ゐ宿ゐ。及ぶ侍らいと不楽しくゐ侍れども東道
儲ハ母屋ゐ。執運しくまゐらせんけりうあらぬい立ゐ。憩せゆと他事もなくゐ
津ゐ舟ゐ。虚ゐ。瀬十郎ハ応ゐ。沈吟しくゐ欽ゐ。彼此
田ゐ履。李下ゐ冠人の疑難の影護ゐ。弱ゐ婦人と一傘ゐ方ゐ。送ゐ
やとのゐ聴ゐ。ゐ笑ゐ宣ゐ。人視ゐ白書ゐ影護ゐ
ゐもあらんを小歇ハ今ゐ。雨夕ゐ途ゐ暮ん枉く救せゐ。
口説ゐ果ゐ折ゐ瀬十郎ゐ後者ハ粟田口ゐ借侍ゐ暮笠ゐ身ゐ著ゐ雨
衣木履傘ゐ引提く頻ゐ走り来ゐ。這十字堂ゐ侍ゐ程ゐ瀬
十郎やと呼返しくゐ。ゐ屋折ゐ侯不楽ゐ。ゐ霽
間ゐ雨ゐ生憎ゐ歇ゐ暮ゐ近ゐ。ゐ條ゐ宿所ゐ相傘ゐ借ん

いる。斯と知らば傘を彼処ぐ二柄借せんゆ今ゆくたての甲斐なし。とうま折伏こたうて
たくそうさ痛ち死るゆるん。些い細雨ゆふるんこれがあん傘の片端を貸ゆふとも共借ゆ。
濡さをゆふいあらじ。ともやくもあく誘ゆくとのひて被ゆ包くる雨衣をとりかせと
瀬十郎推禁めく。現汝ぐ。既ゆ細雨ようてるよ雨衣被ていふ。
その代ゆ包ここく持ゆ。ようや濡るとも麻衣の袂涼くるんのこ。嘲阿夏とのとゆえ今
ゆら捨てら去ぐた。便路るれが送べ。さられ足駄をのくゆせ。れら跣足ぐもんのこ。
折伏それをまるらせよとのひく袴の稜とり揚るを。阿夏ゆ急ゆ推禁めそゆ物
体るたゆ佐り傘の庇を假初るら送りのるそうゆあん。ゆ足駄をのゆく安
穿くゆるんや。出ひもりけゆゆそ。と推辞ら恥く遠く。嵩裏げく副帯を締
易んとち程ゆ折伏ゆ獨笑ゆ。女中且く等のあれ庇間の小間た處ゆ女子ゆ
足駄一雙ゆ。這御價ゆ詣者の置送れ狡脱捨狡。そこ。

脹塗足駄の巳時るるゆ。ゆ草緒で阽氣る。ぐく。真実くちく。取出ゆ
推直ゆ。阿夏ゆたく合咲く。ゆ出ひけざた物怪の幸ぐ侍るか。この年来
清水寺の観世音を信ぐ佐れが。地方ゆられども亦ゆ。菩薩の利益ゆそ。
有ゆ出ぬぐ尊や。と雲時本尊を伏拝めが。瀬十郎もゆれをたく彼太山ゆ貸
ゆ。貨ゆ心るるり。そのこを得。と老氏ゆくゆ。ゆを細小る物るれども時ゆ取てら
千里の駿足圖ら成りける大吉の冥助。寔ゆ奇るり妙るりけり。ぐく出るくやりひ
かけく先ゆ立ち傘を披く。鞭轤の出納牙ぐた郎ゆ。ゆ形の草鞋を其処ゆ
脱棄く足駄穿ち立出る。阿夏ゆ迹へ折伏ゆ立替ゆ取揚。裏附草履
うち合。主の半履共侶ゆ二雙抓ゆ。ゆ佯態をたく。ゆ阿夏ゆ。ゆと抗て憚ゆ。
とゆるゆ。ゆ暮近た野路の雨ゆ。ゆ郎と相合傘ゆ。ゆ視平ゆ。ゆ横頬吹濡ゆ。
たそ今ゆ。ゆ厭ひ。ゆ世ゆ。ゆ百稔の露の命よ君ゆ為ゆ。ゆ照る日ゆ。ゆ岡ゆ。ゆ数ゆ。ゆ雨ゆ。ゆ今

笠屋るつ

御厨野路
次小夜瀬
十郎阿夏
を送る
きそ次十郎
折仗
出像第六

胄の媒妁と思へば娯一傘の柄のまよみをもとり部山吉田黒谷横ぶつく辿る
凸凹高足駄路の泥土も苦ふるうく後の歎ふるる川橋ふ尚秋風い吹ぜ一。
阿夏瀬十郎が悪因縁むすび初る賀茂河の北漏さ下と思ふ胄ふたゝく
涌こゝろ。維摩の悟道隨芸落一と渡る三條大橋の秋涼一く暮果く稍ゝ
宿所ふ著よけり登時阿夏へ遠一く懐帝の間より鎰ゝ一の戸閾て走り
入ゝく火を鑽てゝ行燈ふ移も程ふ瀬十郎ゝ川邊ゝ去んとぞ。
阿夏へやゝと呼被く袂ふ携被留めゝひろけるれあ庇奥ゝく足も汚さぞ濡も
せぐゝの著る欲ひを沼述ぞ一くこの侭ふ果敢ゝく還一まらんや家路を急
ゝとも暮果くまぐ程ゝならぞ枉く且く憩せるとゝりなり留めく放ゝ瀬十
郎ゝ又さゝふ心よゝくと揮も拂ゝぞゝ時宜ゝ瀬ゝふ了モと言ゝゝと何容々く
とゝ上座ふ坐をゝれゝ折火も笠を脱ゝく框ふ上ゝ有右面阿夏ゝ

背門ふ立ゝく嘗をゝち鳴ゝせゝ母屋ゝ応と答ゝ一箇の小厮の走り来ゝと。
ゝぞ侭耳を被ゝ一く。如此々ゝと耳ゝぞ小厮ゝゝる果ゝ退ゝ時を
移ゝぞ酒殽を廣蓋ゝ唱ゝる塗折敷ふ処陝ゝく。種々載ゝ
ゝを障子のほとゝふ措一たる。阿夏ゝ折火をゝゝく。ゝん匂ふ薄酒一椀
まゝゝせんと思へゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝ母屋へゝゝく出ひの隨ふたゝゝ
幸ひゝゝん。とゝふを瀬十郎推禁めゝく。ゝゝゝゝの義ふ及ん。ゝち捨ゝく措ゝ空
ゝ間ふ母屋の小厮ゝ庇間ゝゝゝ造ゝく。折火ゝほとゝる来ゝ。ゝぎ案内を仕ゝん
見ゝ方へ来ゝせと誘ゝふ。折火ゝゝ立難ゝ。ゝゝ恭ゝゝゝゝゝ殆迷惑住ゝゝゝ
ゝち置一ゝゝと陽辞一くゝを捺むゝ小厮ゝゝ推辛ゝ。ゝぞ侭母屋へ伴
ひけゝ當下阿夏ゝ荒ゝふ瀬十郎ゝち對ひゝ。ゝを特さゝ端近ゝ。縫樓へ
登ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ躰ゝ燭墓ふ火を移一携ゝ先ふ立ゝ案内ゝゝ

瀬十郎を怒ゐ去よられぬる船の不ゐ中ゆ心。思ひ賀ゐ支る刀を把く。
登る階子の恋の山浮名取川最上川濡ゐ石濡く阿武隈川ゐ迷ひ初め道
なら坂の陸奥の名蹟の京師ゐ名ある心地しを。空を頭を通しゐ四下を遠
矮樓ゐ席薦六畳を布設く所東のくゐ置床あり次の間ゐ屏ゆく夜
物を敛る料ゆ棚架るべ二枚の茶禅を建くるが。柱ゐ樓の花笠壮丹花
扇笠両三箇と近属より世間ゐ弄ぶ三弦胡弓るどを棋うかれば遠女あり。
絃管をりて世を渡る歌伎るらびゐ俳姫るらんと雲く猜まるのますぐ詳るる
ゐを知らぬ却説阿夏を酒殽を表く矮樓ゐ運び登しゐ思ひ寄しゐ縁
ゆく今より親しくるせゐゐん見参のちゐめゐ待れゐと恥しゐ歎待ゐ御足を駐め
まるらせし妾ゐ生ぶとも大抵猜しゐ春花より芳しゐん君ゐ御
名を賀まほしゐ。れのぎくとのひらけく盃を薦ゐ瀬十郎ゐ推辞ゐ由く寔ゐ不

測の値偶ゐ依り其のころ役者ちぐ酒食の饗応ゐあるゐ過世ゐ歎び
ゐ。今ゐ何を隠むべ五侍ゐ大内殿の近臣ゆく陶瀬十郎奥房と呼るゐめ
ゐ四月の比より在番ゐ京師のゐ殿ゐ疎ゐ傷痛く思れん女ある
じぐゐるとゐ。獨居でゐらんゐ家内ゐ人ゐもゐ夜飲ゐ耽ゐを大膽不敵
罪ゐ深ゐ支ゐ。とゐを阿夏ゐ笑ひく。噫ゐ。ゐ殿もゐる妹伎の縁ゐ
出雲ゐく神の結せゐとゐ迷ゐ賀ゐ明く正木のゐ末ゐ通せゐん
ゐとのゐ祈るゐ処ゐのゐ鮮ゐ。ゐ裡墨の土器ゐ
朱盃ゐ時繪の鶴ゐ雌雄ゐ千歳ゐ。ゐ容ゐの年齢ゐ若ゐ浦ゐ。ゐ盧の
華濡れく満潮ゐ。ゐれ餘念ゐ酒ゐ礼ゐ好ゐく乱ゐ終ゐ。ゐ荘周ゐ
けんゐ現宣ゐゐ男女席を同ゐ飲酒ゐ則色ゐ嫌ゐ猿狂ひ意馬ゐ
瀬十郎ゐれゐ。ゐとゐ芦環ゐ三輪ゐ酒ゐ過酔ゐ堪ぶ

寐の果敢なき夢を結びけり。この時従者折々は飽まで飲食して。阿夏が
宿所にかへり来つ泥のごとくに酔ければ框に尻を掛る随また仰に倒れ熟睡なして。
蚊に刺るゝも知ざりけり夏の夜なれば短くて枕に響く明六の鐘に瀬十郎を
驚覚して後悔するも大かたならず。このよは主君に願ひまゐらせて私に出る序に昨
夕かくもさるべしが辛ふじて外るゝとも先輩の甲乙が出ん程も影護し。いつにまさ
と搔揃る額を頻りに病まれば。阿夏もさすがと慰めて。このよは別のたゞ絶なんと唄ふ
曲子は皆さながら逢みずまま色の慾は宿の首尾の今宵なれ。わし分船の譚立て。
縮の綱の結ぶならんや。と向ば瀬十郎沈吟して。武家は門戸の限りありて私要ある
ぬ夜を犯して還るとなれば外にあるまじきなれども。されど幾時便點を得る筒様々の
所以ありて吾侍なる日野西殿と万里小路殿を訪ひなばこの本日夜深て帰る
とも次の日に至るとも主君の許させ給ふぞかし。朋輩も亦この義を料りにかれ昨

夕も日野西殿へ参りたといへるのみ斯誘詐る優にあらじ。といへば阿夏は胸押撫て。
そんな欸しなるのにならん首尾整へて遠からで便り待して居ひる。といふ間に瀬十郎は懐の
吊緒に掛る袴をぬぎ取卸して足蹈入れ。背後に阿夏が腰板の紐ふり分て
推當るむねもなく結ぶ二世の縁憑むが妹と瀬十郎は懐にもてける鼻紙囊を
搔捌りて方位二枚とり出し。おなじ聊なる物ながら酒食の料にとひらけて紙に捻て
取らするを。阿夏は受ず推返して。優なる身には絡らねども。財帛に愛て客を惹く宿遊
女ならぬものを。けるまでいはるゝ願ひはそれをおん後者に取して口を鉗めさせ後
々までも障はあらじといへば瀬十郎は強るも且は羞て領くのみ。惣て其意に任せ
とて刀引提て遽しく下屋に到る筥階子の手摺も高き足音に踏覚さるゝ折
従者は稍身を起してあわて慌忙ぬ徐と直ちに足駄は雨後の旦天の晴さもよし
湿る笠屋阿夏が別路の名残はそれや鴨河原情郎は逝く水とぞ絶かねて目

送りけり扨も這笠屋夏の親の名を續くるえりこれが母なるべし笠屋夏の女歌舞伎は
大柏也。大頭とかや。年来四條河原まあり常に歌舞伎を興行して生活をたりふ。
応仁の内乱ふ洛中も洛外も兵燹のあるよ餘波ふ郊原荒土となりしが世渡りは便
著るくなりて初めは似るべうもあらぬとする程に母の夏の長病病著に臥こりしが朝
夕の炊も病人と共侶はいとく細りて今の阿夏が年二八ばかりなりし秋の比遠かむかく
るるよりは是よりしてそが女児の母の名を業續て笠屋夏と唱れば歌舞艶容
止めその親に優まりぬるも常歌舞伎は勾欄絶てより再興はべくもあらねば或は俳優
或は糸竹の技をもて富る家の酒宴に招れ吹鼓舞奏はく壽を述興を添るを活
業に生涯えり今るに母の夏が世ふあり一時伊勢なる安濃津の商賈ふ末松屋
木偶次と唱るもの年毎ふ京上りして貿易を宗とする程ふ今の阿夏ふ眷想
あてられるふ銭鈔を費はとのくをぞくをるを知らぬ。されば阿夏ふ木偶次が男態田

舎備く面の色如赭く眼圓ふ唇厚く鼻ふ左右の頬まで閑紅を点ぜ能の獅子
頭ふ相似るを忌嫌ひく風流門の垂柳靡くがごとくもあらぬ。木偶次なる人
ぞ。桜が下の芙蓉葛葉綾ふ寅縁思ひをよせて舊里へ立ぬ。有如之程ふ阿夏が
母親ふ病著に臥こりより衣食住の三が一にも資るものあるとなければ況某剤の價ぞ。
かれ集めても藻塩草足らぬ世帯ふ困じ入りて木偶次よりつを賄ひて某種も價直
貴を厭ぬ。晝夜とるく存問く資とるるを大くこるるが。阿夏ふ恩義の枕を被られ。
親のあふ疎し郎と枕を並べまりこの時ふ彼を木偶次ふ年来の本意を遂てこの活
業ふ多まつ。阿夏が母の身まりこの送葬の事七々の法筵雑費も總て木偶次が
嚢中より抓出せば物そのものとのふ一限ふ情慾のあふ限ふ傾と喪ぬられ
所以ふ本銭ふ借りて舊里ふも京師ふも送りたの身と借財のみ伊勢津なる家も
庫も古借の債ふ沽取られ妻子の離別せ一時ふ幼稚な女児を括著られ従僕

東西ふ去く親戚義絶ふ及びを木偶火い悔もせば故郷より推上され五オンけ
女房とも阿夏が宿所ふ寓ぜをり阿夏い素より好ーかり及郎ゑれども受ゑ恩あ
生そいゑともらいゑそ遂それゑふ夫婦よゑりゑ木偶火い今ゆらふ青買せんゆ本銭ゑ
けれ阿夏が酒醼の席へ召れて彼此へ赴くをり俳優の衣裳を携ゑ三絃組を肩に
ゑ。送迎をゑつゑミこれゑ親子三人の衣食ふ支足ゑくゑゑゑれば阿夏い暇ある毎に木
偶火が携ゑ子ゑ。女児ふ傀儡を誨ゑ。ゑくゑその名を小夏と喚做ゑ。然程ふ木偶火い来
薪の竭んとゑると阿夏を招く花主ゑ。ゑれば已ゑを沒ぎ小夏をゑく四條河原ふ立
消ー小夏ふ舞をゑゑ。その刃い設管笛を吹く。細腰鼓を鳴ゑー縄ふ銭を投く
刃ゑそ親子の口を餬ふ日もありけり。有之程ふ隔昨日い大津ゑる良賈の家ふ算賀の
酒宴ありとゑく音曲のゑふ阿夏を招ゑ。ゑれ阿夏い女児を伴ひく木偶火ふ衣裳ゑ
線箱ゑ。ゑどを背負ゑ。その家ふ赴ゑ。ふその終夜の酒ゑふ疲労れてきのふ正午

まゑ彼処ふゑり。辞ー去ゑんとせー比ふ小夏い腹の痛むとく厠ゑひゑ時の程ゑば。
阿夏い木偶火を送ー置く小夏が癢の果ゑをちらくゑそゑゑとく。ひとゑ家
路へ急ぎーふ御廟野の邉ふそ夕立雨ふ笠ゑりーと圖らば陶瀬十郎ふ邂逅
ゑゑ。木偶火も小夏もその霄いかゑらーとゑひーゑば。ゑゑ時ふ
事の其処ふ及べゑゑゑ色い思念の外ゑいゑど阿夏素より艶曲歌舞ゑ生
活とゑもゑ弱女ゑれい操を扇の松ふ做ふ貞実節義ふ疎ーとく外ゑゑゑ
のゑゑ彩ど。陶瀬十郎い陪臣ふそあれ采邑幾万貫ゑ領ーゑ陶遠江守
政房が子ゑゑふ路の柳牆の花ふ甚ゑれば心迷ひ人の識を忘ざけん過せゑ
ゑ悪縁之間話休題却説瀬十郎與房ゑ。その日管領邸ふゑりても阿夏が
ゑのゑ心ふゑゑく送れんとゑるふ忘られぬ凄い絃管をゑと世を潔る歌妓ゑんゑ
猜せーゑども。家の内ふゑゑゑもゑゑ彩ぐゑとふゑんゑゑび彩て問ゑゑゑゑゑゑ

と。左ハ右より勤仕ハ暇ゐるゝ一ゐ五六日を過ぐ程れ有一日相撲の甲ひと江湖上の話説の序ハ瀬十郎ハそれ兵ゐるハ三條大橋の西町より如此ゝゐる美女あり。と咲ハ渠ハいゐるゝのゐちゑんと外ゐるゝく諸るハそのゝ人々合笑てそハ笠屋夏ゐるゐゐゐゐ。素より渠ハ女親ハ女歌舞伎の大柏ゐゐ元今ハ夏もその技ハ堪能のゐえゐ。箇様ゐゐの芸ハゐゐく末松木偶ゑとハ醜郎と夫婦ハゐゐゐゐ又小夏とゐ唤れ。年五六可ゐる小女見ゐ。そゐ木偶ゑゐ携ゐ子ハ夏ゐ事ハ世ハ隠れもなゐを今まで知らゐハ疎ゐハそ渠ハゐゐと。見方ゐるゐも召ゐゐくとゐゐと咲ぬ況市人の富ゐるゐゐハ渠を飲酒の敵ゐハゐく艶曲を聴歌俳を弾ゐを最上の楽とゐるゐゐり。但我殿ゐゐゐゐゐ重職ハゐゐれハ。俺ハゐゐも世を憚ゐを渠ハを沼ゐを招ゐゐれと正首ゐ説ハゐ畢竟瀬十郎ハ夏ゐ素生を詳ハ知らゐ又甚麽ゐる話説ゐゐゐゐ次の巻ハ説分ゐを聴ゐハ。

近世説美少年録第一輯巻之二終

村田